

【(マスカレードと)カサンドラの吸血鬼】

登場人物

- ・小澤芹奈(セリナ)……『カサンドラ』の看板娘。豊唾者にしてダンサー。心配事が多く、いつも不機嫌そうな顔をしている。
好きなものは、家族、ダンス、光の当たるところ、赤色。
- ・吸血鬼”(K)……セリナの弟。カーミラ症候群を持って生まれ、吸血鬼として扱われている。戸籍がなく、本名を誰も知らない。
好きなものは、セリナ、アクロバット、血液、暗闇、黒色。
- ・橋本英雄(ハザマ)……慈善団体”マスカレード”のリーダー。骸骨のマスクをしている。マスクの下もウオーペイントで素顔を隠している。
好きなものは、愛情、支配、信念、(正しい意味合いに基づく)犯罪行為、暗い場所、銀色。
- ・檜山叶(かなえ)……”マスカレード”の参謀、広報、取引窓口を担う快活な女性。真鍮の仮面をしている。
好きなものは、人間、お金、自由、未来、明るい場所、黄色。
- ・渡辺慶(ジョーカー)……”マスカレード”創始メンバーの1人。ヒロのマスクをしている。病気の妹を救う為、密かに臓器売買に加担している。
好きなものは、力、女、スリル、賑やかな場所、白色。
- ・大池照人(おおいけるひと)……臓器を違法に売買する闇医者。『吸血鬼』の存在を突き止め、人身拉致に利用する為、Kに近づく。
- ・横井尊……千恵子を誘拐した実行犯の1人。観客に紛れ込んでいる。
- ・アノニマス……マスカレードの新人。ガイ・フォークスの仮面を被っている。
- ・能面玲奈……マスカレードの新人。能面を被っている。

【0】『前説』

横井、客席に紛れ込んでいる

かなえ(仮面姿)、カンペを持って舞台へ

かなえ「会場にお集まりの皆さん、こんにちは！(または『こんばんは』)私達は名も無き慈善団体です。

今の社会は不安定です。法律は不完全で、いつもどこかで多くの人が不当な目に遭っています。

私達は、自分の身は自分で守らなければいけないんです。でも、みんなそれができたら苦労しない。そこで私達の順番です！私達の活動は、『個人の自由と尊厳を守ること』。その為であれば、法律より信条を優先します。みんな仮面を被っていることが多いので、便宜的に『マスカレード』と呼ばれています。

今からお見せするものは、マスカレード結成からおよそ1年後に起きた出来事です。

あくまでショーですので、心が動いた時は遠慮なく泣いたり笑ったりしてください。

でも私語はお控えください。

また、上演中は携帯をミュートにしてください。

撮影や録音は、一部のシーンのみオーケーです！撮影オーケーのシーンでは、目印の立て札が立ちます！

それ以外のシーンは、撮影禁止とさせていただきます。

上演中、みだりに席をお立ちにならないでください。体調不良の場合は遠慮なく係員にお申し付けください。

あと、一部のシーンでは、演出上メンバーが客席に絡むことがあります。ご了承ください！

(カンペを畳んで)以上、マスカレードからお願いでした！最後までごゆっくりお楽しみください！」

照明、暗転

かなえ、はける

【第1場】『カサンドラ』

ハザマ(マスク)、板付き

ハザマ「ここに、1つの奇跡が起きた。だがこれは聞くに堪えない物語だ。残酷で、悲しく、苦痛を伴うに違いない。だが、俺達はどうしても伝えなかったんだ。どうか、最後まで目を背けないで欲しい」

照明、ハザマにスポット

ハザマ「あちよつと、おい！ やめろやめろ！ この俺にスポットライトは要らない」

照明、ハザマのスポットをアウト

ハザマ、手持ちのライトを自分の顔に当てながら観客に絡む

ハザマ「見ろ、これが俺の姿だ。俺は人間じゃない。光の当たる場所では生きていけない。この世と地獄の狭間。それが俺の生きる世界だ。(手持ちライト)にはは、これいいな。まあ率直に言えば、俺達は人殺しだ」

セリナ、イン

照明、セリナにスポット

セリナ、踊り出す

ハザマ「そこにいるのは潔白な少女だ。俺達のような邪悪な日陰者とは訳が違う。俺が昔ひいきにしていたレストランで、看板娘をやっていた。そのレストランというのが、『カサンドラ』だった。この時、カサンドラの店長、小澤千恵子が失踪して3ヶ月が経っていた。この店の家系は代々、非業の死を遂げる人が多かったそうだ」

ハザマ、はける

大池、拍手しながらイン

セリナ、途中で大池に気づいて踊りをやめる

大池「やあ、さすがだね。素晴らしい、素晴らしいよ」

セリナ、戸惑いながら深々と頭を下げる

大池『カサンドラ』にはいつも驚かされるよ。まるで呪いと引き換えに数奇な運命を引き寄せているようだ。特に君は天使だ。まさにこの世界が生んだ宝だよ。チャージ料をどうぞ」

大池、万札を差し出す

セリナ「……？」

大池『見物料』だよ！ 全てのモノには値打ちがある。そう、君のダンスのような、形のないモノでもね。何も遠慮することはない。これは私からの気持ちだよ。受け取ってくれるかな」

セリナ、恐る恐る金を受け取り、頭を下げる

大池「ところで、このカサンドラには何か秘密があるんじゃないかな？」

セリナ「……！」

大池「隠し部屋があるとか、誰かを匿っているとか……そう、『吸血鬼』を飼っているとか」

セリナ「……」

大池「いやあ、ちよつと病院の関係でたまたま記録が出て来たものでね。興味が湧いたんだ。……君には弟がいる」

セリナ、首を振る

大池「とぼけなくてもいい。お母さんがいなくなったと聞いて、私も力になりたいんだよ」

セリナ「……」

大池、テーブルに着く

大池「……まあいい。君にその気がないのなら、仕方がない。食事でもして行こう」

K、イン

K「……」

大池「！ 驚いた……君が噂の『吸血鬼』かな？」

K「あんた誰だ？」

大池、名刺を渡して

大池「私は医者だよ。大池と呼んでくれ。大池照人。おお！ イケてる人！ なんてね」

K「……(セリナに)ちよつと、向こう行つて」

セリナ「(手話)なんで？」

K「後で説明する」

セリナ「……」

セリナ、はける

K「……セリナ、病気なのか？」

大池「とんでもない！ 彼女は健康そのものだよ。いや、それを超える存在だ！ 今にも死のうとしている人達の希望の光だ！」

K「なんで俺を呼んだ？ つていかでこで知った？」

大池「込み入った話になる。まあ座りたまえ」

K、テーブルに着く

大池「何か飲むか？」

K「いい」

大池「あ、そうか！ 君にはこれだったね」

大池、鞆から輸血パックを取り出す

K「!？」

大池「君の話聞いてワクワクしたよ。あれから興奮して夜も眠れない！ ああ、カサンドラ！ もう私はこの虜になりそうだ！」

K「御託はいいから用件を言えよ」

大池「まず、これを君にやろう。本物だよ」

K、慎重に輸血パックを取る

大池「なに、毒なんか入っちゃいない！ 正規の献血による健康な成人女性の血液だ！ 新鮮なうちに飲んでくれたまえ」

K「……」

大池「あまり大声を出さずに聞いてくれ。いいね？」

K、うなづく

大池「……君達のお母さんを預かっている」

K「ー！」

大池「シー。そうだ。はは。お母さんを連れ去ったのは私の部下だ」

K「……どこへやった」

大池「落ち着け。君が協力すれば生きて帰す」

K「……」

大池「ちよつとややこしいんだが……、一から説明しよう。夏の健康診断で、セリナの身体から驚くべきものが見つかった。何だと思う？」

K「……」

大池『黄金の血液』だ」

K「は？」

大池『黄金の血液』だよ！ いや、厳密には血液だけではない！ まず、セリナはアールエイチナルと呼ばれる、アールエイチの抗原を持たない極めて特殊な血液型だったんだよ。もっと詳しく調べてみたら、なんとエイチエルエーも同様の特性を有していた！ 彼女の臓器は、ほとんどどんな人に移植しても拒絶反応を起こさない！ 免疫抑制剤も必要ない！ まさに奇跡の血だ……」

K「……話が見えて来ねえんだけど」

大池「最後まで聞け！……いいか？ 私はただの医者ではない。私は世界中のブラックマーケットで人間の臓器を斡旋している」

K「……！？」

大池「正直なところ、私が本当に狙っていたのはお母さんじゃない。……セリナだったんだよ」

K「……」

大池「だが部下は何をトチ狂ったか、セリナ本人ではなく母親の方を連れて来た！ 似ても似つかんだろうが大馬鹿野郎のコンコンチキが！ 何だあの女は！？ 闇金から借金を抱えていて、危うく私が殺されそうになったじゃあないか！」

K「親父の借金だよ」

大池「私はお母さんの借金を代わりに返すと約束しなければならなかった。いくらだと思う？ 2000万だ。2000万だぞ！ あと30日以内に2000万用意できなければ、私は君のお母さんをバラバラにして、眼球から心臓まで全て売りに出すしかない！」

K「ふざけんな！ そんな破茶滅茶通る訳ねえだろ……黙って母さんを返せ……！」

大池「待て待て待て。安心しろ、お母さんを救う方法はある。取引だよ」

K「……」

大池『カーミラ症候群』……聞いたことあるかな？」

K「……知らないね」

大池「君の病名だ。お母さんと直接話してピンと来たんだ。500万人に1人しかいないといわれる奇病。太陽の光に弱く、血液を摂取しなければ生きていけないという、まさに『吸血鬼』の様相を持って生まれる特殊な疾患だ。心当たりがあるんじゃないか？」

K「……」

大池「カーミラ症候群の罹患者は、人間の血液型を嗅ぎ分けられると聞いたことがある。……そうなのか？」

K「……生き物の匂いに色々パターンがあるのはわかる」

大池「ああ、やはり君は本物だ！」

K「いや、違うね。血液型にしては種類が多すぎる」

大池「違わない！ 血液型は何万通りもあるんだよ。ああ、アールエイチナルの次はカーミラ！ なんと恐ろしい！ カサンドラはどうしてこんな化け物ばかりを作り出すのか！」

K「まさか俺達を売ろうって話じゃねえだろうな」

大池「違う違う。大事なのはここからだ。君に働いてもらいたいんだ」

K「……？」

大池「特定のタイプの臓器を集めて欲しい。その嗅覚を使つてな」

K「……？ 臓器を、集める……？」

大池「そうだ」

K「……『人をさらえ』と？」

大池「なに、ただちよつと『お連れする』だけだ」

K「……冗談じゃない。お前みたいな人の皮を被ったケダモノと一緒にたまるか」

大池「おいおいおい、それじゃあお母さんの身体をバラ売りにするしか——」

K、テーブル越しに大池の胸ぐらを掴む

大池「ぐっ……!!」

K「母さんを返せ」

大池『『ゲダモノ』になりたくないんじゃないのか……?』

K「害獣駆除には抵抗ないんでね」

大池「はっ、私を殺したところで、お母さんは戻らないぞ……!!」

K「生かしておいたらセリナを狙うだろ」

大池「! ……は、ははは……!! 逆だ、命令を取り消せるのは私だけだ……!! 私が消えれば、部下は今度こそセリナを捕まえに来る……!!」

K「ハッターだな。やれるならとっくにそうしてる」

大池「そ、そう思うのは君の自由だ……私は常に利益の高い方を取る……!!」

K「……」

大池「君と手を組めば、ドナー1人当たりの単価がぐっと跳ね上がる……!! 検査の手間が省ける分、余計な犠牲だつて減らせるはずだ……!! それで一時的に命令を保留にした……!! お母さんのことも、ほとぼりが冷めるまでは傷つけないように手配してある……!!」

K「……」

大池「さあどうする? 手を放さなければ、お母さんは死ぬ……!! セリナもじきそうなる……!! それとも私と組んで、お母さんを取り戻すか?」

K「……母さんが戻った後、セリナにも手を出さないと誓え」

大池「ははは……もちろんいいとも。君がセリナ以上の利益を上げてくれたらな！」

K「……」

K、手を放す

K「……クソ野郎」

大池「ふう……。恨むなら、この呪われた『カサンドラ』に生まれ落ちた自分を恨んでくれ。煮え湯を飲まされたのは私だって同じだ」

セリナ、イン

セリナ「……」

K「どうした？」

セリナ「(手話)そろそろお客さん来るんだけど……」

K「客が来る？」

セリナ、うなづく。輸血パックに気づく

セリナ「……!？」

大池「お邪魔かな？」

K「ああ、邪魔だね」

大池、立ち上がる

大池「(セリナに)少し、弟君とデートに行っても構わないかな？　もうだいぶ日も傾いたしな。妙に気が合ってしまったてね」

K「……!?!」

大池「(Kに)こっちはケツに火が着いてるんだ。今日から早速取り掛かってもらうぞ。おっと、これは私が持つておこう」

大池、輸血パックを鞆にしまう

K、立ち上がる

セリナ「(手話)どこ行くの……?」

K「……」

大池「……」

K「……血を。血をもらいに行く」

セリナ「?」

K「ほら……、古くなった輸血用の血だよ。病院で余ってるから引き取って欲しいんだって」

セリナ「……」

大池「……ああ、血液は保存が利かなくて、処理に困っていたんだ。弟君が吸血病だということはここだけの秘密にしておくよ」

セリナ、しばらく考え、何度かうなずく

K「心配要らない」

K、フードを深々と被り、両腕を上着の中に引込める

K「連れてけ」

大池、セリナに手で挨拶し、Kを連れてはける

セリナ「……」

ハザマ(ウォーペイント)、イン

ハザマ「……」

ハザマ、セリナに近づき、手で挨拶する

セリナ、気づいて会釈する

ハザマ、テーブルに着く

セリナ、コップを取って来てテーブルに置く

セリナ「……」

ハザマ「……店長、まだ見つからないのか？」

セリナ、うなづく

ハザマ「一人で、大丈夫か？」

セリナ「……」

ハザマ「店、閉めないのか？」

セリナ「……」

ハザマ「……」

セリナ「(手話)何か食べる？」

ハザマ「料理、できないだろ」

セリナ、少しムツとする。裏からお菓子などの入った袋を持って来てテーブルに置く

ハザマ「……」

セリナ「(ジェスチャー)どうぞ」

ハザマ「……。食事は、いい。それより、踊って欲しい」

セリナ「(手話)……また？」

ハザマ、うなずく

セリナ「……」

セリナ、舞台中央に移動し、ポーズを取る

ハザマ、セリナの目を盗んでテーブルの上に万札を差し出す

セリナ、振り返る

セリナ「！」

セリナ、お金をハザマに返す。ハザマ、受け取らず

ハザマ「いいんだ、持つてろ」

セリナ、首を振る

ハザマ「大丈夫だから。ただのチップだよ」

セリナ、お金をテーブルに置いて

セリナ「(手話)わからない……」

ハザマ『わからない』?」

セリナ「……」

ハザマ「聞いても、いいか?」

セリナ「?」

ハザマ「どうやって、生活してる?」

セリナ「(手話)……わからない」

ハザマ「本当に、大丈夫なのか?」

セリナ、うなずく

ハザマ、名刺をテーブルに置いて

ハザマ「何かあったら、ここに連絡をくれ」

セリナ、名刺を見つめる

セリナ「……？」

ハザマ「俺は……俺達は、人助けをしてる。いなくなった人を探したり、ストーカーを追い払ったり……争いごとを、やめさせたり」

セリナ「(手話)……。でも、払うお金なんか——」

ハザマ「金のことはいいから。店長、母親なんだろう？」

セリナ「……」

ハザマ「俺達なら、探し出せるかもしれない」

ハザマ、セリナの前に跪いて手を差し出す

ハザマ「……」

セリナ「……」

セリナ、しばらく迷って、身体を背ける

ハザマ「……」

セリナ「(ジエスチャー)ごめん……」

ハザマ、首を振る

ハザマ「……気が変わったら——」

ハザマ、握手しようと手を伸ばす

セリナ、手を振り払って、いそいそとテーブルを片付ける

ハザマ「……？」

セリナ「(ジエスチャー)帰って」

ハザマ「？」

セリナ「(手話)お母さんのことはほっといて！」

ハザマ「……すまなかった」

セリナ「……」

ハザマ、出口に向かう。出口前で振り返って

ハザマ「もう1つだけ聞いていいか？」

セリナ、腰に手を当てながら

セリナ「(手話)……何？」

ハザマ「名前は？」

セリナ「(指文字)……セ、リ、ナ」

ハザマ「……セリナ」

セリナ、うなづく

ハザマ「(手話)また会おう」

ハザマ、はける

セリナ「……」

セリナ、重い足取りで椅子に座る。少しして、万札に気づく

セリナ「！」

万札を手に取り、出口前まで走る。出口の向こうを見ながら、床を何度か踏み鳴らす

セリナ「……」

セリナ、諦めて裏にはける

【第2場】『ピエロ』

照明、ジョーカーにスポット

ジョーカー(素顔)、妹と電話している

ジョーカー「——そ、そうなんだ……。具合はどうだ？ 苦しくないか？ ……ああ……。縁起でもないこと言うなよ……」

大池、ゆっくりと近づいてくる

ジョーカー「大丈夫だって！ お前は死なない……死なせないよ……！ 金は俺が何とかする……いや、してみせる！ 必ず前みたいに元気に

暮らせるようになるから……！ だから……それまで待つてろよ……絶対、絶対死ぬんじやねーぞ！ ……わかった」

ジョーカー、電話を切る

大池「妹か？」

ジョーカー、大池に頭を下げる

ジョーカー「……お願いします！ あいつを……どうか、助けてやってください！ 何でもしますから！」

大池「そう言われてもな。心臓は恐ろしく高額だ。私の一存でどうにかなるもんじやないんだ」

ジョーカー「俺、もつと死ぬ気で働きますから！」

大池「金の問題だけじゃない。当然の話、心臓移植にはレシピエントに適合するドナーが必要だ」

ジョーカー「……探してみせますから！」

大池「はつ、相変わらず無茶苦茶な男だ。お前の無謀のせいで、こっちはギャングに殺されかけたんだぞ！」

ジョーカー「あれは俺のせいじやないつすよ！」

大池「あれだけじゃない！ いいか、私は怒っているんだぞ」

ジョーカー「……？」

大池「お前がアテにしていた情報屋。連中は一体何者だ？」

ジョーカー「……俺の、親友です」

大池「その親友とやらが、この私のビジネスを、嗅ぎ回っているんだ！」

ジョーカー「……？」

大池「まだピンと来ないか？ 脳みその代わりに大腸菌でも詰まってるんじゃないか！？ 連中は情報を集めるのにどんな手段を使う？ 言ってみろ！」

ジョーカー「あ、えつと……聞き込みしたり、盗聴器とか使ったり——」

大池「例えば……？」

大池、盗聴器を見せる

ジョーカー「……！」

大池「部下の車に仕掛けられていた。そいつを吊し上げたら怪しい女を乗せたというじゃないか」

大池、携帯の画面を見せる

大池「この顔に見覚えはないか？」

ジョーカー「！」

大池「調べたところ、名前は『檜山叶』と出て来た。恐らく偽名だろう。違うか？」

ジョーカー「それは……」

大池「なるほど、本名なのか。住所は偽装したものだった。丸1週間張り込んだが、住んでいたのは別人だ。盗聴データはこいつが持っているはずだ」

ジョーカー「……」

大池「居場所を知ってるな？ 大至急、檜山叶を殺せ！」

ジョーカー「お、大池さん！……そ、それだけは無理っす……！」

大池「全く、なんだってこうどいつもいつも私にケチを運んで来るんだ！ この間抜け！ それならお前との関係はこれまでだ！」

ジョーカー「ま、ま、待つてください！ お、俺……よくこの人と一緒にいるんすけど、まだそこまでは気づいてないはずなんすよ……！」

大池「お前の言うことは信用ならん」

ジョーカー「これはマジで確かです！ もうずっと命がけでやってきた仲なんで……わかるんすよ……！」

大池「これつきりだぞ！ 命だけは見逃してやる。だが証拠だけは徹底的に処分しろ！ 檜山叶のパソコン、携帯、記憶媒体から便所の落書きまで全て灰にしろ！」

ジョーカー「は……はい……！」

大池「今度少しでもトチったら、お前の妹を神経毒の実験体にしてやる。わかつたな！」

ジョーカー「……はい……！」

大池、はける

ジョーカー「……」

大池、再びイン

大池「そうだ」

ジョーカー「うえ！？」

大池、ブレスレットをジョーカーに差し出す

大池「盗聴器と一緒に、こんなものが落ちていたぞ」

ジョーカー「これ……かなえさんのつすか？」

大池「親友のことなら何でもわかるんじゃないか？ お前が盗んだと思われなくては、こつそり返してやるんだな」

大池、はける

ジョーカー「……」

かなえ(仮面)、カンペを持って舞台へ

ジョーカー、はける

かなえ「当時、カサンドラの付近で行方不明事件が相次いでいました。私達は真相を突き止めるべく、事件について調べていたのです。セリナのお母さん、小澤千恵子は、そんな失踪者の1人でした」

【第3場】『マスクの集団』

——隠れ家——

玲奈(能面)、アノニマス(マスク)、ハザマ(マスク)、バラバラに座って休んでいる

かなえ、仮面を外し、席に着いて。パソコンを開く

ハザマ、マスクを外す

ハザマ「来てたのか」

かなえ「おはよう。っていうか寝る時マスク外せば！？ めっちゃ湿気こもりそう」

ハザマ「何かわかったか？」

かなえ「んつとね、わかったことが1つ。失踪者は殺されたんじゃないかと、連れ去られたらしいってこと。盗聴した声から『値段』がどうか『腎臓』か『心臓』がどうかって会話が聞こえた」

ハザマ「人身売買か」

かなえ「多分そうだよ。なんか主犯っていうより雇われてやってる感じっぽかった。きっと黒幕見つけないとまた被害が続いちゃう。で、わかんなくなったことが1つ」

ハザマ「何だ？」

かなえ「その犯人が、今度は行方不明です」

ハザマ「消されたのか？」

かなえ「まだわかんない。盗聴器から何も入って来ないし、LINEしても全然既読つかない」

ハザマ「……気づかれたんじゃないか？」

かなえ「かなあ……普通に前日まで服とか買ってもらいまくってたんだけど。あたしのせいでローン地獄で死んでたらごめん。はあ……マジ可愛
いって罪。そっちは？」

ハザマ「……」

かなえ「ん？」

ハザマ「カサンドラのダンサー……あいつは何か知ってる」

かなえ「怪しそう？」

ハザマ「……犯人というほどじゃないんだが……、消えた母親の話を妙に避けたがる」

かなえ「そりや……。あんた本当デリカシーないよね！ 急にお母さんいなくなったらそりや寂しいし怖いに決まってるでしょ！」

ハザマ「3ヶ月も経ってるんだぞ。少しは落ち着いてもいい頃だ。それに、店長である母親がいなくなって、カサンドラは今料理を出せなくなって。客も来ない。なのにいつも1人でダンスショーを続けてるんだ。不自然すぎないか？」

かなえ「どうしていいかわかんないだよ。人って本当に追い詰められると何にも考えられなくなるの。あるでしょそういうこと」

ハザマ「……。もう少し調べたい」

かなえ「まあいいけど……その前に今日もう1発現場行ける？」

ハザマ「……？」

かなえ「横山さんと」。あのストーカー野郎、『警察にチクったら』ってまたしつこいんだって」

ハザマ「チツ。馬鹿は死ななきゃ治らねえんだな」

かなえ「でも殺すとかそういう極端なのは本当最終手段にしてよ……？」

ハザマ「はいはい頑張ります」

ハザマ、上着の内側からハンカチを取り出す。更にハンカチの中から赤いカプセルを取り出し、口に放り込む

かなえ、葉に気づいて

かなえ「ちよ……！ つと……。薬物乱用しすぎ」

ハザマ「ただの気付け薬だよ。ちよつと寝る」

ハザマ、座ったまま眠る

かなえ「いや思いつきり劇薬だからね。全身麻酔解けるんだよそれ」

ジョーカー(素顔)、イン

かなえ「おかえりー」

ジョーカー「！ お、お疲れ様です！」

かなえ、パソコンをいじりながら

かなえ「何、また前借り？」

ジョーカー「い、いえ！ 大丈夫つす！」

かなえ「そつかあ。何隠してるの？」

かなえ、電話をかけ始める

ジョーカー「えっ……！！？ な、何も隠してないつすよ……」

かなえ、立ち上がって席から遠ざかる

かなえ「もしもしー。夜分にすみません。ご依頼の件なんですけども、ちよつとですねえ、うち殺し屋じゃないんで、あの内容だけだとお引き受けするのは正直難しくて」

ジョーカー、周りの目を盗んで慎重にかなえのバッグを開ける

かなえ「あ、はい。それは大丈夫ですよ。そうしましたら改めて担当の者向かわせますので。はい、よろしくお願いします」

かなえ、電話を切つて振り返る

ジョーカー、開いたままのバッグを身体で隠す

かなえ「何してるの？」

ジョーカー「あ、いや、待機してます！」

かなえ「オッケー！ じゃあちよつとアポ取るねー。もしもし！ 夜分にすみません。あのー、ご依頼いただいた件なんですけども、打ち合わせのお日にちが『できるだけ早く』とのことだったのでご連絡差し上げたんですが」

ジョーカー、かなえのバッグにブレスレットを入れる

かなえ、玲奈の肩を叩く

ジョーカー、慌ててバッグを隠す

かなえ「車回しといってくれる？」

玲奈、何度か頷き、立ち上がってはける

かなえ「はい、大丈夫ですよー。場所のご指定が特になければこちらでご利用しますので」

ジョーカー、かなえのバッグを慎重に閉じる

ハザマ、立ち上がる

ハザマ「だあああああああああ！」

ジョーカー「!?!」

かなえ「シー！」

ハザマ、バッグに気づいて

ハザマ「……何してんだ?」

ジョーカー「あ、いや、別に。ただどけただけ……」

かなえ「いやーうるさくてすみません。仕事柄ちよつと変な人も来るんですよ……」

ハザマ「ははははは……!」

ハザマ、ふらつきながらはける

かなえ、アノニマスを手で呼ぶ

かなえ「ついてって」

アノニマス、急いでハザマを追う

ジョーカー、かなえのバッグを完全に閉じ、ほつと一息つく

かなえ「はい。スタッフ2名向かわせますので。そちらで待っていてください。はい、ではでは——」

かなえ、電話を切る

かなえ「ねえ、人の鞆漁んないでくれる?」

ジョーカー「え、だ、うえええ!?!」

かなえ、バッグの中身を確認しながら

かなえ「駄目だよ泥棒しちゃ。つつーか鞆漁るのは普通にあり得ないわー生理的にキモいわー」

ジョーカー「し、ししししてない! してないっす!」

かなえ「あれ?」

ジョーカー「……!」

かなえ、ブレスレットを取り出す

かなえ「これ入れた?」

ジョーカー「あ、そ、そ、その、それは、入ってました!」

かなえ、ブレスレットをまじまじと見つめる

かなえ「えーウケるんだけど。……』愛する人と結ばれる。光の当たる場所で』」

ジョーカー「……」

かなえ「えー、マジ? ヤバい。ヤバーい。超嬉しいんだけど」

ジョーカー「はい?」

かなえ「えー何? これ。誕生日プレゼント?」

ジョーカー「あ、は、はい。そんな、感じ、つす」

かなえ「マジかあ。あたし全然誕生日じゃねーし。でもありがとう」

ジョーカー「……」

かなえ「つーか悪いんだけど早く行つてー。お客さん待つてるから」

ジョーカー「あ、はい！ はい！」

ジョーカー、慌ててはける

かなえ、席に着いてブレスレットを見つめる

かなえ「……いつやー直接渡して欲しかったわあ。これは。熱い」

かなえ、ブレスレットの裏側を見る

かなえ「……『これは光のお守りです。これをつけて、明るい場所に身を置くと、生涯で最も愛する人が、あなたの前に現れるでしょう』……そうなんだ」

かなえ、ブレスレットを持ったままトイレに立つ。出入り口と反対にはける

K、電話しながら、かなえがはけた側からイン

K「……入ったぞ。……いや、誰もいない。……明かりは点いてる」

照明、Kにスポット。対角線上にもう1つスポット

大池、電話しながらスポットにイン

K「……で？ 檜山叶って誰なんだ」

大池「誰でもない。ただ、始末すればお母さんの寿命が伸びる。それだけの存在だ」

K「そうやって何でもかんでも言うこと聞くと思ったら大間違いだぞ」

大池「お母さんを見捨てるということかな？」

K「場合によつてはな」

大池「ははは。これは単なるボーナスだ。やるかやらないかは君が決める。人1人生かしておくのだってタダじゃないんだ。少しでも時間を稼ぎたいなら、おとなしく指示に従った方が賢明だぞ」

K「一旦切るぞ。誰か来る」

大池、はける

K、電話を切り、辺りを探る

置いてあつた鞆の1つから、手榴弾を取り出す

K「……！」

かなえ、ブレスレットを着けて、ハンカチで手を拭きながら戻つて来る

K「……」

かなえ、Kに気づく

かなえ「うわあびつくりした！ えっ、誰！？」

K「静かに」

かなえ「え、誰……!?!」

K「シー、動くな」

かなえ、ゆつくりと両手を上げる

K「檜山叶か？」

かなえ「え……つと……あなたは？」

K「俺は名前がない。手短に聞くぞ。誰かに殺される覚えはあるか？」

かなえ「……」

K「俺もあんたが敵なのか味方なのかわからない。だから確かめたいんだ」

かなえ「あるよ、いつばいある……でもあなたがどの繋がりかわからない……」

K「……」

かなえ「どうやって入ったの……?」

K「窓から入った」

かなえ「……? ここ4階だよ……?」

ジョーカー「(そでから)かなえさーん」

かなえ「!」

K、安全レバーを握ったまま、手榴弾のピンに指を引っ掛ける

ジョーカー、イン

ジョーカー「かなえさん、俺——」

かなえ「ジョー君ストップストップ！」

ジョーカー「うおええええええ！？ ちよ、誰すかこいつ——」

かなえ「黙って！」

K、ピンを抜き、かなえを捕まえる

ジョーカー「野郎！」

ジョーカー、咄嗟に近づいてくる

かなえ「ダメ！！」

K、手榴弾を床に投げ、かなえを道連れに窓側にはける

ジョーカー「うっそっだろ！？」

ジョーカー、手榴弾に覆いかぶさる

かなえ「(そでから)え、ちよ、待つて待つて待つて待つてあぁあぁあぁあぁー！」

ジョーカー、しばらくして身体を起す

ジョーカー「……マ……ジ……かよ……危ねえ……」

ジョーカー、窓の外を確認しに行く

ジョーカー「かなえさーん！！」

ジョーカー、電話をかける

ジョーカー「そんな、マジかよ、冗談だろ……ドッキリだろ……！？（電話に）ハザマ！速攻戻って来て！かなえさんが拉致された！」

ジョーカー、電話を切る

ジョーカー「初めから殺すつもりだったんだ……」

ジョーカー、パソコンをいじり始める。少しして、かなえの携帯をポケットにしまう

ジョーカー、手榴弾の部品を拾い集める

ジョーカー「……戻せんのかなこれ」

【第4場】『地下牢』

——カサンドラの地下牢——

K、かなえを連れて入って来る

かなえ「はあ、はあ、はあ……！」

K「……大丈夫か？」

かなえ「あ、あんまし……大丈夫じゃない……」

K「……すまない」

K、輸血パックの血を飲む

かなえ「……」

K「……爆発の音は聞こえなかった。あれはきっと、レプリカだ」

かなえ「あなた、何者なの……?」

K「これか? ……何ていうか……特異体質なんだ」

かなえ「……何をしに来たの? 誰かに雇われてるの……?」

K「……まあ、そんなところだ」

かなえ「あたしを殺せって?」

K「……ああ。それか、生け捕りにして連れて来いと」

かなえ「……それだったら、殺して欲しいかな……」

K「?」

かなえ「……死ぬのは、覚悟してるの。この活動始めた時から」

K「……。お前、何者なんだ?」

かなえ「何も聞かされてないの？」

K、うなづく

K「俺はただ脅されて動いてるだけで、事情は何も聞いてない。……本当はこんなことしたくなかった」

かなえ「……そ……つか。そうなんだ」

K「こだったら電波も何も届かないし盗聴される心配もないから少しは時間が稼げる」

かなえ「……。じゃあ、守ってくれたんだね」

K「……そうとは言えないな。拉致して監禁してるのには変わりないし」

かなえ「……あたし達は、慈善団体なの。法律の隙間を縫って悪さしてる人をやついたり、裁判沙汰になりそうな人達を手取り早く和解させたり」

K「ふーん……弁護士か何かか？」

かなえ「ううん、全然。法律つてマジでアテになんないからさ。結構ゴリ押し……ぶっちゃけほとんど犯罪組織だよ」

K「……。お前達は、金の為に人を殺したりさらったりするの？」

かなえ「いやあ、それはないかな。むしろ、そういうことを平気でやってる人と戦うのが仕事。……でも、人が死ぬってわかってて物事進めることも全然あるから、あたしももう人殺しと変わんないよ」

K「……」

かなえ「そりゃあ恨まれても仕方ない。殺されても文句言えない。だから、覚悟してるの」

K「そうか……。俺は、3ヶ月前に母さんが失踪したんだ」

かなえ「……!」

K「それで、つい半月ぐらい前に、犯人の方から接触があった。『生きて帰して欲しければ命令に従え』ってな」

かなえ「……連続誘拐犯……顔を見た？」

K「ああ」

かなえ「詳しく教えて。それ多分、あたし達がこんとこずっと追ってる奴らだよ。そいつらは人間の臓器をお金に換えて儲けてる!」

K「……! そうか……だからあいつはかなえの命を狙ったんだ」

かなえ「……えっ? ヤバくね? じゃあうちが調べてんのバレてたの?」

K「そういうことになるだろうな」

かなえ「ちよ、ちよと! うちの隠れ家の場所どうやってわかったの!??」

K「わからない……俺はただ電話で道を指示された」

かなえ「ヤバイ……全員殺されるパターンじゃんこれ。あたしちよと一旦帰っていいかな。携帯おいて来ちゃった!」

K、躊躇する

かなえ「お願い! すぐ知らせないと仲間が殺されちゃう!」

K「母さんが人質に取られてる……」

かなえ「!」

K「ここでかなえを逃がしたとわかったら、あいつは母さんを殺しかねない」

かなえ「……」

K「……。俺が行く」

かなえ「え!？」

K「とりあえず隠れてろ。あいつには『捕まえた』って言うておく」

かなえ「え、ちよ、ちよと待って！ あのさ、うちの男連中本当何するかわかんないから！」

K「何とか話してみる。敵の敵は味方だ」

かなえ「いやもうそういうの全然聞かないでいきなり襲いかかってくるよ！」

K「だろうな。あの感じなら」

かなえ「え、マジで殺しに来るよ？」

K「……。じゃあ少なくともかなえとは敵じゃないって証拠を作ろう」

かなえ「え?」

K、スマホを取り出し、かなえと肩を組んでカメラを構える

K「笑って」

かなえ「え、そういう感じ?」

K、シャッターボタンを押す

K「もう1枚」

K、かなえにスマホを渡す

かなえ、ノリノリで写真を撮る

K、スマホを受け取る

K「行ってくる」

K、はける

かなえ「へえ……ウケるね」

【第5場】

——隠れ家——

ジョーカー(素顔)、パソコンをいじっている

ハザマ(ウォーペイント)、イン

ジョーカー、慌ててパソコンを閉じる

ハザマ「かなえは？」

ジョーカー「見失った。パソコンのデータもそっくり消えてる」

ハザマ「なに？ どのデータ？」

ジョーカー「写真とか連絡先。今まで俺達が集めて来た情報ほとんど」

ハザマ、パソコンを開いて確かめる

ハザマ「……」

ジョーカー「……」

ハザマ、机を叩く

ハザマ「クソ！ クソーーーー！！」

ジョーカー「……」

ハザマ「……敵の顔を見たか？」

ジョーカー「ああ、見た」

SE、携帯のバイブ音

ジョーカー「！」

ハザマ「……鳴ってるぞ」

ジョーカー「あ、ああ……」

ハザマ「出ないのか？」

ジョーカー「こ、これは……その……」

SE、ノックの音

ハザマ「！」

ハザマとジョーカー、顔を見合わせる。急いでマスクを着け、凶器に手をかける

ハザマ、慎重に鍵を開け、後ずさる

K、両手を見せながらゆつくりと入って来る

ジョーカー「ハザマ、こいつだ」

K「話し合いに来た」

ハザマ「かなえはどこだ？」

K「無事に保護してる」

ジョーカー「ハザマ、やっちまおう」

ハザマ「データを消したのはお前か？」

K「何のことか知らないが違う」

ジョーカー「何を言おうが耳を貸すな！」

K「証拠もある。俺は敵じゃない」

K、慎重にポケットに手を近づける

ジョーカー「うっらあああああああ！」

ジョーカー、Kに襲いかかる

K、即座に反撃する

ハザマもKに襲いかかる

2対1の格闘戦にもつれ込む

Kの動きが素早く、2人の攻撃が当たらない

ハザマ、倒される

ハザマ「ハハ……！」

ハザマ、ふらつきながら再戦

ジョーカー、完全に倒され、気を失う

ハザマとK、掴み合いになる

ハザマ「かなえはどこだ」

K「隠したんじゃない、保護してるだけだ」

ハザマ「どこにいる……！」

セリナが入って来る

K「……！」

セリナ「……!?!」

ハザマ「……!」

セリナ、2人を引き離す

K、スマホの画面をハザマに見せる

K「ついさっき撮った写真だ。これが無理に笑ってる顔に見えるか？」

ハザマ「……」

セリナ「(手話)……どうなってるの?」

ハザマ、マスクを外す

ハザマ「……知り合いか?」

K「! あんただったのか」

ハザマ「?」

ハザマ、ジョーカーの息を確かめる

ハザマ、電話をかける

ハザマ「怪我人が出た。戻ったら病院に運んでやつてくれ」

K「(セリナに)なんでここに?」

ハザマ「俺が呼んだ」

セリナ「(手話)何があつたの？」

K「……」

セリナ、崩れ落ちて両手で顔を覆う

ハザマ「セリナ」

セリナ「……」

K、セリナを叩いて

K「(ジエスチャー)呼んでる」

セリナ「？」

ハザマ「大丈夫だ」

セリナ「……」

セリナ、ハザマに手紙を渡す

ハザマ、手紙を黙読する

照明、舞台面にスポット

かなえ(仮面)、カンペを持ってスポットにイン

かなえ「手紙にはこう書いてありました。こちらが実物です。今読みますね。『いつもダンスを褒めてくれてありがとう。お母さんのことを聞か

れた時は、正直戸惑いました。これを書いている今も、本当は迷っています。私はまだ、あなたを信じていいかどうか分からない。もしも秘密を守れないなら、この先は読まず、手紙を返してください』

ハザマ、少し考えて、ページをめくる

アノニマス(マスク)、入って来てジョーカーを運び出す

かなえ『私は、お母さんを見つけるのが怖い。私には弟がいます。事情があつて、生まれてこの方存在を隠されて育ちました。戸籍もなく、お母さんも弟の名前を教えてくださいませんでした。弟は、もしかしたらお母さんを恨んでいるのかも。邪推だけれど。実は、お母さんがいなくなつてから、弟の様子が少し変。陰で何かこそそしている。もしも、もしも、これは到底考えたくもないことだけれど、お母さんの失踪に、弟が関わっていたら、私は、立ち直る自信がない。お母さんは生きてるの？ もしお母さんが見つかったら、弟はどうなるの？ 怖い』

ハザマ「……姉弟なのか？」

K、うなづく

ハザマ「何て呼んだらいい？」

セリナ「(指文字)K」

ハザマ「……『K』？」

K「何て書いている？」

ハザマ『秘密にしてくれ』と書いてある。それより、先にはつきりさせておきたい。なぜ俺達の前に現れた？』

K「……」

セリナ、ハザマから手紙を取り上げ、Kに突きつける

照明、セリナとKにスポット

K、手紙に目を通す

K「……俺を疑ってたのか？」

セリナ「(手話)本当はどうなの？」

かなえ『本当はどうなの？』

K「母さんを連れ去ったのは俺じゃない」

セリナ「(手話)何か知ってるのね？」

かなえ『何か知ってるのね？』

K「全部終わったら説明する」

セリナ「(手話)答えて！」

かなえ『答えて！』

K「……」

セリナ「(手話)互いを偽るだけの関係なんて——」

かなえ『互いを偽るだけの関係なんて——』

セリナ「(手話)愛じゃないよ」

かなえ「……『愛じゃ、ない』……」

かなえ、はける

K「……。奴らの狙いは母さんじゃない。本当に欲しいのはセリナだ」

セリナ「……?」

K「セリナの臓器は普通の人間より何倍も高く売れるらしい。あと10日でセリナを引き渡さないと、母さんは殺される」

セリナ「……!」

K「もしくはセリナを売るよりも高い金を稼げば見逃すと言ってた。……それから、奴らのことを嗅ぎ回ってる人間を始末すれば、期日を延長すると」

ハザマ「それがかなえか」

K「そうだ」

ハザマ「殺すのか?」

K「それは出来れば避けたい。だからここへ来たんだ。あんたらの力を借りたい」

ハザマ「……。データを消したのはお前じゃないのか?」

K「あいつは手下を何人か雇ってる。スパイが入り込んできたら別にいる」

ハザマ「……。先手を打たれた。手がかりが消えちゃった」

K「……。何も残ってないのか?」

ハザマ「……」

K、手のひらを殴る

ハザマ「……かなえの所へ案内しろ」

K「どうする気だ？」

ハザマ「何か覚えてないか聞き出す。最悪、敵に引き渡して中から探らせる」

K「……いや、それはダメだ。犬死になるのは目に見えてる。……セリナ」

セリナ「……？」

K「……母さんは、諦めよう……」

セリナ「……！」

K「もうすぐ夜が明ける。俺は日光の下では生きられない。今のうちにかなえを逃がして、2人で身を隠す。それから、ここはもう場所が割れる。あんたにも早く逃げた方がいい。迷惑かけてすまなかつたな」

ハザマ「行くアテはあるのか？」

K「……」

K、首を振る

ハザマ「……」

セリナ「(ジエスチャー)待って……」

K「……？」

セリナ「(手話) ……ごめん」

K『ごめん』? 何が?」

セリナ「(手話) 私も、隠してたことがある……」

K「隠し事がある?」

セリナ、うなづく

セリナ「(手話) ……私は」

K「私は」

セリナ「(手話) お母さんが連れ去られるのを」

K「母さんが連れ去られるのを」

セリナ「(手話) ……見た」

K「見た……!!?」

セリナ「(手話) 犯人の1人……」

K「犯人の1人……」

セリナ「(手話) ……顔を覚えてる」

K「顔を覚えてる……!!?」

セリナ「(手話) あんたがあの中での1人だったらどうしようって……」

K「俺があの中のもの1人だったらどうしようって？」

セリナ、何度もうなずく

K、セリナを慰める

ハザマ「……。このゲーム、続けるか？」

K「何か思いついたのか？」

ハザマ「ああ。だがかなり危険な賭けだ」

K「……言ってみろ」

ハザマ「セリナの母親をさらった張本人をおびき出す。雇われたのがただのケチなチンピラなら、網にかかるかもしれない」

K「……どうやって？」

ハザマ「マスカレード。パーティーを開く」

【第6場】

——カサンドラ——

K、椅子に座って輸血パックの血を飲んでいる

大池、パーティーのチラシを持って入る

大池「相変わらず美味そうに飲むな。『吸血鬼』」

K「……」

大池「それで、檜山叶はどうした？」

K「……殺すのはまだ躊躇してる」

大池「まるでいつでも殺せるかのような口ぶりだな」

K「檜山叶はもう生け捕りにしてある。期日ギリギリまで考えさせろ」

大池「はっ、グルになつて作戦会議か？」

K「ちげーよ。あいつはまだ若すぎる」

大池「なるほど。年寄りばかり連れて来るのは君なりの良心だった訳だ。ターゲットを選ぶ余裕があるのなら、今度からはなるべく50歳以下にしてくれたまえ。使えるパーツが多いに越したことはないからな」

K「……」

大池「ところで、明日はパーティーを開くそうじゃないか。『未解決事件の真相達』。ふっ、面白そうだ。私も同席していいか？」

K「俺が企んだんじゃないよ。俺を脅したつて今更。パーティーは止められない」

大池「後悔しても知らないぞ」

K「……」。後悔しない為に今こうやって生きてる。呪いだか運命だか知らねえが、突き落とされるなら自分から飛び降りる」

大池「諦めるには早すぎるんじゃないか？ お母さんの臓器だけでは、まだ2000万には届かん。君が反抗的な態度を取るなら、今度同じ目に遭うのはセリナだ」

K「テメエを道連れにできるなら本望だろうよ」

大池「……！」

K「……」

大池「……まあ、せいぜい強がっておけ」

大池、小瓶を取り出し、Kに渡す

大池「今度のターゲットだ」

K、小瓶の蓋を開け、匂いを嗅ぐ

K「……」

大池「本音を言うのと、私も君を手放したくはないんだよ。仕事は適確で手際がよく、しかも戸籍にも載っていない。おまけに産廃まで処理してくれる。君にこれ以上の天職があるか？」

K「……」

大池「カサンドラは君に呪いをかけたんじゃない。才能を与えたんだ！」

K「……人殺しに加担する『才能』？」

大池「とんでもない！むしろ君は人を救っているんだ！1人の犠牲で7人が助かることだってある！」

K「数の問題じゃねえ」

大池、輸血パックを取り上げる

大池『数の』問題だ！ 君が飲んでいる血液だって生身の人間から出たものだ。世界人口の1%が君のような吸血鬼になってみる。血液の供給が追いつかず、瞬く間に殺し合いの戦争だぞ！」

K「……」

大池「私は臓器移植が受けられずに死んでいった患者を大勢見送った。ああ、ここに……！ここに！ たった1つの腎臓があれば！ 彼はこんなに苦しみながら死なずに済んだのに！ パズルのピースが1つ欠けたばつかりに、女子供の切ない泣き声が一晩中鳴り止まない……！ 私はケダモノじゃない。救える命を救いたただけだ！ わかってくれるかな……！？」

K「……」

大池「ありがとう。やはり君は私が見込んだ通りだ！」

大池、はけながら

大池「お母さんはきつと助かるぞ。これからもその調子で働いてくれたまえ」

K「大池」

大池「何だ？」

K「お前は人の命をどう見てる？ どうすればそんな風に割り切れる？」

大池『輝き』だよ。命とは希望そのものだ！ 死の淵に立たされていた患者が奇跡的に息を吹き返し、家族と対面を果たす瞬間！ あの感動は何物にも代え難い！ 君も見ればわかる。あの喜びを分かち合う為には、どうしても犠牲が必要なんだ！」

K「……」

大池「ドナーの死は決して無駄ではない……！ いや、ドナーの命はレシピエントの中で尚も生き続ける！ 私は……いや『私達』は、尊い命に再び輝きを灯す為には、悪役を買って出ているにすぎない！」

K「……」

大池「私の仕事場を見に来るか？ そうすれば君の迷いもきつと晴れるに違いない」

K「……わかった」

大池「……？」

K「1回見せろ。それで本当に納得行ったら、あんたについてくかどうか、マジで考える」

大池「……！」

K「だけど条件がある。まずセリナをつけ狙うのだけはやめろ」

大池「……いいだろう」

K「それから、かなえもだ」

大池「……君がそう望むなら、そうしよう。だが、奴は私達の仕事の意義を理解していない。もしもこれ以上邪魔をするようなら、その時は情けをかくなよ」

K、洪々うなづく

大池「パーティーには出席するのかな？」

K「いや。陰から見てる」

大池「そうか……。では、念の為私の代わりに見張っておいてくれたまえ。何も起きないと思うがな」

大池、改めてはける

【第7場】

——地下牢——

Kとかなえ(素顔)、床に座り込んでいる

かなえ「——そうなんだ……。大丈夫だった？」

K「何とも言えないな。大池の奴、どこまで感じてるんだかよくわかんねえ」

かなえ「……パーティー、明日だね」

K「ああ」

かなえ「これで失敗したらあたし死ぬしかないね！」

K「かなえは死なせないよ」

かなえ「……。でも、悪くないんじゃないかな。罪のない人を助けたいっていう、『自分の信じること』の為に命を散らすっていうのも……」

K「……」

かなえ「ああ、別にそんな重く考えないでよ！ あたし本当平気だから！ つていかもうそういう感じで生きてるし」

K「いや……。誰かが生きる為に、別の誰かが死ぬって、どうなのかな」

かなえ「……」

K「大池が言うには『1人の犠牲で7人救えることもある』って……。一理あるっちゃあるし」

かなえ「……。あたし達の場合、『何人救えるか』じゃなくて、『好きな人を救えるかどうか』って感じかな」

K「……」

かなえ「なんか、いつの間にかあたし達似てきちゃったね」

K「かなえは、こんな暗い部屋が好きか？」

かなえ「え？ うーん……。たまにはこういうとこにいたくなるかな」

K「俺は、この部屋で10何年も生きてきた」

かなえ「……」

K「セリナともずっとここで遊んでた。あいつは明るい場所の方が好きだけど。……でも俺は太陽に当たるとマジで死ぬから」

かなえ「もしかして、太陽見たことないの？」

K「なくはない。うーん……。朝日とかで、土砂降り雨降ってたらまだ1分ぐらいいける」

かなえ「1分!？」

K「うん。それか全身完全防備でこんな分厚いサングラスかけて、やっと出れる感じ」

かなえ「へえー、大変なんだね」

K「別にそうでもないよ。暗い所好きだし」

K、立ち上がる

K「そろそろ日が暮れたかな。ちよつと夜の街徘徊してくる」

かなえ「う……うん！ 行つてらっしゃい」

K「……悪かつたな。色々」

かなえ「ううん！ 全然平気！ エンジョイしまくってる」

K「……あの、ピエロの奴にも謝つといて。ちつとやりすぎた」

かなえ「ああ、大丈夫大丈夫！ ジョー君頭撃たれても死なないから！」

K「仲、いいのか？」

かなえ「うん！ 活動始める前からずっとね」

K、口元だけ笑う

K「ありがとう」

K、出口に向かう

かなえ「K！ ……つて、呼んでいいんだよね？」

K、うなづく

かなえ、ブレスレットを外す

かなえ「これ、あげる」

かなえ、ブレスレットを渡す

K「……?」

かなえ「明日にはもう、会えなくなっちゃうかもしれないから」

K「……」

かなえ「それ、親友にもらったんだ。誕生日プレゼントだったの。半年ぐらい早かったけど」

K「え、半年!？」

かなえ「お守りなんだって。それつけてると、『一番好きな人が目の前に現れる』んだって」

K「……『光の当たる場所に身を置け』……だつてさ。俺には無縁だな」

かなえ「……効果、あつたよ」

K「俺は……かなえとは住む世界が違う」

かなえ「そんなことないよ」

K「……」

かなえ「……K?」

K、身体ごと振り返って

K「かなえ。お前はもう危ない橋は渡るな」

かなえ「え……?」

K「光に耐えられない奴もいる。暗闇に潜む『ケダモノ』は、無理に照らそうとすれば光を消そうと襲いかかってくる」
かなえ「……？」

K「お前は光の当たる場所で生きろ。……生きてくれ」
かなえ「……」

K、はける

【第8場】

照明、セリナとハザマ(ウオーペイント)にスポット

セリナ、跪いて何かを祈っている

ハザマ、椅子に座ってセリナを眺めている

セリナ、顔を上げる

ハザマ、立ち上がってセリナに仮面を渡す

ハザマ「全てはお前の記憶と直感にかかっている。一瞬でも怪しい動きをした奴がいたら、化けの皮を剥いでやれ」

ハザマ、拳を差し出す

セリナ「……」

セリナ、拳をぶつける

ハザマとセリナ、はける

ジョーカー(素顔。頭に包帯)、妹と電話しながらイン

大池、ジョーカーについて来る

照明、ジョーカーと大池にスポット

ジョーカー「——う、嘘じゃないって！ もう、ネガティブになるなよ！ 俺約束破ったことねえだろ？ ……気休めじゃない。今回は……今回はばつかりは。聞いて驚くなよ？ 心臓のドナー、見つかったんだ！ マジマジ！ 金も何とかなった！ いや、本当だつて！ すごくない！？ ははははは！ やってやったよ！ ちったあ見直したか？ 俺がやりやできるってこと！ ……ああ。だから……もう何も心配しなくていい。ただ、元気な顔見せてくれ。……ああ。じゃあな」

大池「よくもまあ同じ口からこうデタラメがポンポンポン出て来るもんだ」

ジョーカー「……かなえさん、殺さないって言ったじゃないっすか……」

大池「お前に任せておいたんではどうなるかわかったもんじゃないからな。後の仕事は吸血鬼にやらせておく。私は帰るぞ」

ジョーカー「妹は！？ ……どうなるんすか……？」

大池「自然の摂理に従うだけだ。不甲斐ない兄を持って、気の毒にな」

ジョーカー「待つてください！」

大池、うんざりしたように

大池「医者には万能じゃないんだ！ 明日は小澤千恵子を『間違つて』連れて来たあのドボンクラのチンピラ野郎が真相の発覚を恐れてノコノコやつて来るぞ！ お前がグルだったこともあっさりバレるだろう。あとは妹さんに適合するドナーが奇跡的に現れることを祈るんだな。ブタ箱

でな！」

ジョーカー「……小澤、セリナ……」

大池「……？」

ジョーカー「アールエイチなんたらっつーんすよね……！？ そいつの心臓だったら、妹にも適合するんすよね……！？」

大池「まあ100%とは言えんがな」

ジョーカー「……小澤セリナの心臓、俺が買います」

大池「はっはっは！ 頭を打って余計おかしくなったんじゃないか！？ やれるもんならせひともそうしてくれ！」

ジョーカー「捕まえます……！」

大池「それが出来ないからこうなってるんだろうが！ あの時の部下はもういない！ お前1人で一体どうする気だ！」

ジョーカー「考えがあるんすよ！」

大池「ふん、百歩譲ってセリナが入ったとしても、金が払えん奴に心臓は渡さん」

ジョーカー「金は……俺の臓器、全部売ってください！」

大池「！？」

ジョーカー「今まで貯めた分と合わせて……心臓1つと交換です……充分じゃないっすか！？」

大池「気は確かか？」

ジョーカー「はい……もう、これしかないんで……」

大池「……妹が好きか？」

ジョーカー「もちろんっす……」

大池「……いや、ダメだ！ 吸血鬼と縁を切るまでカサンドラに手は出せん！ 奴は化け物だ！ それにお前と違って、くだらんへまもしない」

ジョーカー「……」

大池「……話はそれだけか？ もうついて来るな！ お前と話してると時間ももたない！」

大池、はける

ジョーカー「……」

K、輸血パックの血を飲みながらイン

K「……よう」

ジョーカー「よう……呼び出しちまって、すまないな。まだ万全じゃなくて……」

K「俺を恨んでんならお門違いだぞ」

ジョーカー「ああ、違う！ もちろん……。あれは……正当防衛だ。かなえさんのことになると、俺、ちょっと熱くなっちまって……」

K「……。かなえの誕生日、間違えたんだって？」

ジョーカー「えっ……？」

K「ははっ、何でもない。ちょっとカマかけてみただけ」

ジョーカー「……」

K「……かなえに会いたいのか？」

ジョーカー、慎重にうなづく

K「……そうか……。悪いな。まだかなえを出すのは危険すぎる。……殺し屋が俺の他にもおかしくない」

ジョーカー「あ、ああ……。そつか……。残念だ」

K「でもかなえは元気だ。お前のことも気にかけてたよ」

ジョーカー「マジで……?」

K「ああ。それに、ハザマにはかなえの居場所を教える。もし何かヤバいと感じたら、その時は逃がしてやってくれって頼んでおいた」

ジョーカー「あ、じゃあ……。せめて、これ渡しといてくんないかな。……携帯、拾ったんだよね。かなえさんの……」

ジョーカー、かなえの携帯を出す

K「……?」

ジョーカー「本当、たまたまで。ほら……。本当は直接返したかったんだけど……」

K「……」

K、ゆつくりと近づく

ジョーカー「あはは……。そんな怖い顔しないで……。ハザマには黙っとして！ あいつ絶対しつこいから……」

K、携帯に手を触れ、デザインを注視する

ジョーカー、隠し持っていたナイフでKを刺す

K「うおっ……!!」

K、膝から落ち、輸血パックを落とす。ジョーカーを睨む

ジョーカー「暴れるな……出血で死ぬぞ……」

K、輸血パックに手を伸ばす

ジョーカー、輸血パックを遠くへ蹴る

K、ジョーカーの身体を掴む

K「……おおおらあああああ!!」

K、ジョーカーを投げ倒し、ジョーカーのナイフを拾う

ジョーカー「!!」

ジョーカー、輸血パックを拾い、逃げる用意をする

K「はあ……はあ……」

K、倒れる

【第9場】『マスクレードパーティー』

——パーティー会場——

ハザマ(マスク)、舞台面へ

かなえ(仮面)、カンペを持って舞台面へ

玲奈(能面)、アノニマス(マスク)、舞台上へ

照明、ハザマ(マスク)にスポット

ハザマ「これから行われることは、想像を絶する。今ここにいるお前達が、俺達の共犯者になる。どうか、勇気を持って、力を貸して欲しい。準備はいいか？ パーティーを始めよう」

照明、全体明かり

BGM(盛り上がる系)、イン

ハザマ「さあ今日はパーティー日和だ！ 盛り上がってるか！」

かなえ以外全員、合いの手を入れる

ハザマ、客席に絡む

ハザマ「そつちはどうだ！ ああ？ 聞こえねえぞ！ おいおいどうした、仮面を持って来てないのか？ マスクをつけろー！ 羽目を外せー！」

かなえ以外、曲に合わせて盛り上がる

照明、かなえにスポット

かなえ「私達は、小澤千恵子を拉致した実行犯をおびき出す為、一計を案じました。未解決事件の真相を暴露するというコンセプトの元、マ

スカレードパーティーを開いたのです」

ハザマ「この光景はカメラを通してネット配信されている！ 恥ずかしがることはない！ 誰にもお前がわからない！ そのマスク、よく似合ってるぞー！ さあ、この熱狂を心の中にしまっておきな！ カメラを出して、互いを撮り合え！ 動画を撮れー！」

ハザマ、『撮影タイム』の立て札を立てる

かなえ「監視の目を増やす為、お客さんに撮影を推奨しました」

（舞台上に誘う、一緒に写真を撮るなどして観客を誘導しながら進める）

ハザマ「よし、みんな静かにしてくれ！ 感動的なダンスショーが始まる」

BGM、バラード系に変更（クロスフェード）

照明、中央にスポット

セリナ、舞台中央へ

ハザマ「彼女はこの『カサンドラ』の看板娘だ。あいにく料理はド下手だが、独特の立ち居振る舞いとダンスでファンを魅了して来た。盛大な拍手で迎えてやつてくれ。——ああ、そうだ。彼女、耳が聞こえないんだ。手を叩いて音を出す代わりに、こうしてくれ」

ハザマ、両手を頭の高さでひらひらさせる

セリナ、曲に合わせて踊る。しきりに付近の人をさりげなく観察する

かなえ「そして、パーティーは終盤に近づき、いよいよ運命の時が来ました」

セリナ、踊り終える

BGM、フェードアウト

玲奈、舞台上で土いじりの動きをする

ハザマ「なんとなく気づいてる奴もいると思うが、これはただのパーティーじゃない。制裁だ！ 7月30日、この店の大切な料理人だった、何の罪もない平凡な女性……小澤千恵子は連れ去られた。罰を逃れ、今ものうのと生きている犯行グループの『運転手』！ お前は今、このカサンドラにいる」

かなえ「私達は、セリナの証言を元に、事件を再現したのです！」

ハザマ、玲奈の背後から首に紐をかける

玲奈、紐を掴んで尻もちをつく

アノニマス、玲奈の腕を押さえる

ハザマ「これが犯行現場の様子だ。小澤千恵子の首を絞めているのは、事件から3日後に逮捕された大川俊憲。こいつは単なる捨て駒で、事件は謎に包まれた。ところが」

セリナ、仮面を外し、床に落とす

ハザマ「お前は車の中で油断して、顔を隠さずにいた」

ハザマ、紐をしまう

玲奈、アノニマス、奥へ下がる

ハザマ「そして、犯行現場には目撃者がいた。ナンバーも控えている」

セリナ、舞台面へ歩み出て、跪く。客席に目を光らせる

ハザマ「犯人に告ぐ！ お前の名前と住所は突き止めた。このまま暴露されなくなければ、マスクを着けたまま名乗り出る！」

ハザマ、手を上げる

ハザマ「……5つ数える。数え終わったら、一斉にマスクを外してくれ。いいな？」

横井、身体を前に乗り出す

セリナ、横井を見る

ハザマ「……5、4、3、2——」

セリナ、客席に突進する

ハザマ、マスクを外す

ハザマ「マスクを取れー！！」

横井、走り出す

セリナ、横井を捕まえ、無理やり引きずって舞台上に上げる

横井「や、やめろ！」

セリナ、横井のマスクを剥ぎ取る

ハザマ「全員、マスクを外せ！（出入り口に）ここから1歩も出さな！全員だ！」

玲奈、アノニマス、マスクを外し、横井を取り囲んで睨みつける

かなえ、『撮影タイム』の札を降ろす

かなえ「ご協力ありがとうございますー！ごさいましたー！カメラをしまってくださいねー！席をお立ちにならず、マスクももう大丈夫ですー！あ、私この時間軸にいませーん！」

かなえ、はける

【第10場】『尋問』

ハザマ「……パーティーは終わりだ」

セリナ「(ジエスチャー)こいつだよ」

ハザマ、ナイフを取り出し、横井にちらつかせる

玲奈とアノニマス、横井の両腕を抱える

横井「デメエら、何モンだ……？」

ハザマ「こういうモノだ」

ハザマ、ナイフをひっくり返し、横井の太ももを突き刺す

横井「ぐあああああああああ！」

ハザマ、ナイフを抜く

ハザマ「小澤千恵子はどこだ？」

横井「お、俺は知らねえ！」

ハザマ、再び太ももを突き刺す

横井「あああああつー!」

ハザマ「知ってることを吐けば楽にしてやる」

横井「ち、く、しょう……!」

ハザマ「お前を雇ったのは誰だ?」

横井「はあ、はあ……頭のイカれた、臓器ブローカーだよ……! テメエら、奴の仲間じゃねーのか……!?!」

ハザマ「そいつの名前は?」

横井「知ってるのは偽名だけだ……『大池照人』……奴はそう名乗った。あいつはマジで頭がおかしい……それで俺はヤバいと思ってバックレたんだ……ちつくしろう、来るんじゃないか!」

ハザマ「俺達は小澤千恵子を探してる。どこで降ろしたか言え」

横井「はあ、はあ……大体の場所は、カーナビに残ってる……だが、女はすぐに別の車に乗せられた……!」

ハザマ「ナンバーは?」

横井「そ、そこまで覚えてねえよ……!」

ハザマ、疑りの目を見る

横井「嘘じゃねえ!…で、でも、一緒に乗って行った奴のことはわかる! あつ、そうだ! 携帯に入ってるよ! 着信拒否してんだ!」

ハザマ、横井の携帯を取り上げ、中身を確認める

横井「へへ……妙な奴だったよ。あんなサイコ野郎にへこへこしてやがって……しよっちゅう怒鳴られてた。何か弱みでも握られてんじやねーか？」

ハザマ、番号に見覚え

ハザマ「……」

横井「なあ、頼む……警察には言わないでくれ……何でも協力するからよお！」

ハザマ「……ジョーカーか……!？」

大池、電話しながら駆け込んでくる

大池「配信は終わったか!？」

セリナ「!」

ハザマ「閉店だよ」

横井「う、うわあああああ!」

大池「うるさいっ! 面倒なことになった。セリナ、私と来てくれ」

セリナ「……!」

横井「こ、こ、こここいつだ……! た、助けてくれ……!」

玲奈とアノニマス、横井を連れ出す

ハザマ、大池にナイフを突きつける

ハザマ「動くな」

大池「(電話に)……首にナイフを突きつけられている」

ハザマ「……」

大池「……スピーカーにしていいか？」

ジョーカー(素顔)、電話しながらイン

照明、ジョーカーにスポット

ジョーカー「……誰がいる？」

ハザマ「俺だ」

ジョーカー「他には？」

ハザマ「ジョーカー。裏切ったのか？」

ジョーカー「……」

ハザマ「何かの間違いだと言ってくれ」

ジョーカー「ハザマ……」

ハザマ「……」

ジョーカー「……セリナはそこにいるのか……？」

ハザマ「どうしてだ？」

ジョーカー「……。妹を救うのに必要なんだ……」

ハザマ『カサンドラ』の店長を拉致したのはお前か？

ジョーカー「……」

ハザマ「なぜだ！」

ジョーカー「全部妹の為だよ……。心臓病で、移植を受けないとあと半年もたないんだ……」

ハザマ「それで代わりの人間を殺すのか！」

ジョーカー「これが俺の『信念』なんだよ！ 『命より大事なものの為なら人を殺す』……お前だつておんなじだろ！」

ハザマ「違う！ お前は命よりも値打ちのあるものを奪った！ ……セリナをどうするつもりだ？」

ジョーカー「……」

ハザマ「おい……もしもセリナを殺せば妹が助かると思ってるなら……」

ジョーカー「やめろ、それ以上言うな……！」

ハザマ「お前の妹とやらは——」

ジョーカー「やめろ……！」

ハザマ『この身体は最低のゲス野郎に殺された人の心臓が入ってる』！ そして、『そのゲス野郎が、自分の信じた兄だ』……そう思いながら生きていくことになる」

ジョーカー「……！」

ハザマ「考え直せ」

ジョーカー「……。セリナに代わってくれ」

ハザマ「それは無理だ」

大池、咳払いして

大池「セリナは聾啞者なんだ。私が伝えよう」

ジョーカー「……。弟を預かてる……。来なければ殺す」

ハザマ「!？」

大池「……。君が来なければ弟を殺すそうだ」

セリナ「!？」

セリナ、ハザマに

セリナ「(手話)誰!？」

ハザマ「ピエロだ」

セリナ「(手話)何が起きてるの!？」

ハザマ「……」

大池、割って入る

大池「あー、弟が悪い人に誘拐された。助けに行こう」

ハザマ、大池の肩を掴む

ジョーカー「返事は待たないぞ……」

ハザマ「脳みそ足りねえからつて親分の真似事か、ゴキブリ野郎！」

ジョーカー「……！」

ジョーカー、言い返してしまう前に電話を切る

ジョーカー、はける

ハザマ「ジョーカー！……チツ。案内しろ」

大池「待て！ 君は連れて行けない」

ハザマ、大池に詰め寄る

大池「よせよせよせ！ こっちにも事情がある。ギャングに追われているんだ。弟君と働いて金を払って終わるはずだったんだが、君のお友達の馬鹿のおかげでこうなってしまった。もうセリナの臓器を待つてる人がいる。時間がない」

ハザマ、大池に膝蹴りを入れる

大池、倒れる

大池「ごあつ……！」

ハザマ「ふざけたことを抜かすな！」

大池「き……君も人の命を左右する仕事をしてるんだろう……！？ 君と私は同類だ……目を見ればわかる！ 多くを救う為には無関係

な人間が犠牲になることもある……！ 辛いだろが受け入れなきゃならん！」

ハザマ、セリナの肩を掴む

ハザマ「セリナ、こいつらはペン師だ。行けば殺される！」

大池「行かなければ弟が殺される！」

ハザマ「嘘だ！ どの道全員殺すつもりだ！ お前だけでも生きろ！」

大池「3人を解体してる暇はない！ 私が欲しいのはセリナだけだ！ 誓ってもいい！ セリナの臓器を売り切ったら、私は海外へ飛ぶ！」

ハザマ「セリナ！」

セリナ「……」

ハザマ「……行くな」

ハザマ、ナイフを大池に向ける

大池「ぐ……！」

セリナ「……！」

ハザマ「お前は、この世に必要な存在だ……！ この世界から希望の光を消そうとする奴がいる限り、俺は怪物であり続ける！」

セリナ「……」

セリナ、しばらく考えて

セリナ「(手話)……行くよ」

ハザマ「……!?!」

セリナ、震えながらハザマの手からナイフを取り、床に置く

セリナ「(ジエスチャー)連れてって」

大池、よろめきながら立ち上がる

大池「……来る、ということだな……?」

セリナ、うなづく

ハザマ「……」

大池「……本人がこう言ってる。まだ不服かな?」

ハザマ「セリナ……死に行くのか?」

セリナ、首を振る

セリナ「(手話)……決着を付けに行くんだよ」

ハザマ「……」

大池「車を停めてある。さあ行こう」

大池、セリナを連れて出口へ向かう

ハザマ「……待て!」

大池、うんざりしたように振り返る

ハザマ「……」

ハザマ、策を考えながらセリナに近づく。さりげなく大池の死角で立ち止まって、セリナの前に跪いて手を差し出す

セリナ「……!?」

セリナ、ハザマに手を預ける

ハザマ「……どうか、耐えてくれ」

セリナ「……」

ハザマ「(ジեսチャー)何か打たれそうになったら飲め」

セリナ「？」

ハザマ、立ち上がった後ずさる

大池「……済んだか？ 車に乗れ」

大池、はける

セリナ、大池について行く。途中、手の中に渡された赤いカプセルに気づき、ハザマに振り向く

セリナ「……!?!」

ハザマ「……」

【第11場】

K、椅子に縛り付けられたまま気絶している

セリナ、舞台面でうつむいている

照明、セリナにスポット

K、ぼんやりと顔を上げる

K「……セリナ？」

セリナ、うつむいたまま

K、床を踏み鳴らす

セリナ、反応しない

K、更に強く床を踏み鳴らす

セリナ、顔を上げる

K「セリナ」

セリナ「……」

K、身体を動かさそうともがく。動けない

K「……セリナ！」

セリナ「(手話)……大丈夫」

K「何ー！？ よく見えない！」

セリナ「(手話)終わったの」

K「……『終わった』？ 何がー！？」

セリナ「(手話)私達の呪い」

K『呪い』……？ セリナ……それは違う。呪いなんて周りの奴らが勝手に言ってるだけだ。どんなに悲惨な運命が待っていようと、俺達はそれを力に変えられる。2人でそうして来たじゃないか！ まだやり直せる……！」

セリナ「(手話)……見て」

K「……？」

セリナ「(手話)私は、沢山の人の前で踊ることができて、嬉しかった」

K『私は、大勢の前で、踊れて嬉しかった』……」

セリナ「(手話)もし生まれ変わったら——」

K『もしも生まれ変わったら』……？」

セリナ「(手話)またあんな風に踊りたい」

K『またあんな風に踊りたい』……」

セリナ「(手話)光の当たる場所で」

K『光の当たる場所で』……」

セリナ「(手話)愛してるよ」

K「……?」

照明、セリナのスポットをアウト

セリナ、はける

K「セリナ……? セリナ!?!」

K、ぐったりする

ジョーカー(素顔)、大池(意味深な小箱を持っている)、イン

大池「全く、冗談じゃない! どこまで私を困らせれば気が済むんだ!」

ジョーカー「……すみません」

大池「すみませんじゃないよ全く! 今回は無理言つてどうにか手配が間に合ったが、1歩間違えば私が捕まっていたんだぞ! 移植手術が済み次第、その足で日本を発つ! お前を殺すのはそれからだ!」

K「(こ)は……?」

大池「吸血鬼! 目が覚めたか。約束を完遂できなくて身を切るような思いだ……!」

K「……は?」

大池「全てはこいつのせいだ……! こいつが私達の計画を台無しにした!」

K「計画って……？」

大池「この男は君を誘拐して、あろうことか私を脅し、セリナの心臓を病気の妹に移植しろと要求したんだ……！」

K「……！？」

大池「こんなことになって、胸が痛い……！」

K「待てよ……は……！？」

大池「すまない……！」

K「認めねえ……！」

大池「わかつてくれ、吸血鬼。もうすぐお母さんとも会える。借金の件も全て片付いた！だが君が納得してくれないと、この縄を解くことができない……！」

K「ふざけんな！話が違うだろ！」

大池「私も最後まで抵抗した！だが、もう遅いんだ……仕方なかった……！」

K「セリナに会わせろ」

大池「聞いてくれ。お姉さんは、最期に自分の意思でここへ来たんだ。君を救いたい一心でな！」

K「……ここにいるんだな？」

大池「いや……」

K「……」

大池「……お姉さんの解体は、信頼の置ける医者に預けて来た。セリナは何ら抵抗することなく、鎮静剤を投与され、静かに息を引き取ったよ……」

K「……!!」

大池「せめてもの償いだ……! お姉さんの一部を、私が買い取った! これを……」

大池、箱を開ける

K「……」

大池「君が持っていたまえ」

大池、箱の中を見せる

大池「……お姉さんの眼だ」

K「!!」

K、呼吸が荒くなる

K「——ああああああああ!!」

大池、たじろいで後ずさる

大池「……現実を、受け入れてくれ……。これで君は自由の身だ。残されたお母さんと、幸せに暮らさない」

K「……」

大池、ジョーカーに詰め寄る

大池「これで満足か……!?!」

ジョーカー「……妹は、助かるんすよね……」

大池「ああ、私の機嫌次第だな！ セリナの心臓はもうじき病院に運ばれる。お前が買ったんだぞ！ もう後には退けないからな！」

ジョーカー「……はい」

ジョーカー、Kを見る

ジョーカー「……吸血鬼」

K「……」

ジョーカー「……かなえさんのこと、頼んだぞ……」

K「……?」

大池「檜山叶なら、カサンドラの地下にいる」

ジョーカー「えっ……!?!」

K「……!」

大池「ブレスレットのことを覚えてないか？」

ジョーカー「……」

K「……?」

大池「あれは、早い話が発信機を仕込んだものだ。檜山叶の位置情報は、逐一私の携帯に送信される」

大池、携帯の画面を見せる

ジョーカー「……ああ……!」

K「!」

大池「カサンドラで信号が途絶えてから、今日まで一度も更新されなかった。太陽電池になっていて、外出すればすぐに始動する仕組みだ」

ジョーカー「ああ……」

K「……ピエロ」

ジョーカー「えっ!? ……な……何だ?」

K「……お前の仲間は、そういうの詳しいのか……?」

ジョーカー「ええ……? まあ……結構……多分……」

K「……。縄、解いてくれ」

ジョーカー「……!」

大池「……! もう、落ち着いたのかな……?」

K「……ああ。どうせ俺はあんたと同じ側だ。檜山叶を始末する」

大池「!」

K「例の仕事。……続けさせろ」

大池「……その気になってくれたか！ ありがとう！ ありがとう！」

大池、Kの縄を解く

ジョーカー「……！ 大池さん、ダメだ！」

K、大池の首を噛みちぎる

ジョーカー、大池をKから引き剥がす

大池「ぐあつ！ うわあああああああ！！！」

大池、首を押さえてのた打つ

K、傷を庇いながらジョーカーと戦う

大池、辛うじて立ち上がる

大池「そ、そいつを殺せ……！！ ここから絶対に逃がすな……！！」

大池、はける

ジョーカー、咄嗟にブラインドを開ける

照明、舞台面にスポット

K、光から後ずさる

ジョーカー、光の中で待ち構える

ジョーカー「!？」

セリナ、大池の携帯を捨て、ジョーカーに切りかかる

セリナ、揉み合いになりながらジョーカーを滅多刺しにする

セリナ、ジョーカーの心臓めがけてメスを突き刺す

ジョーカー、手で防御する

セリナ、無理やり押し込んで壁際に追い詰める

セリナ「……うおおおおあああああ!!！」

ジョーカー、心臓にメスが刺さり、壁にもたれたままずり落ちる

セリナ、メスを捨ててKを抱える

K「……誰だ……?」

セリナ、Kの目を覗き込む

K「セリナ……なのか……?」

セリナ、何度もうなずく

K、セリナの顔を手で探る

K「……目をやられたのか……?」

セリナ、Kの手を握る

K「……セリナ……」

ハザマ(マスク)、かなえ(素顔)、アノニマス(マスク)、駆け込んで来る

ハザマ、ジョーカーの脈を取る

ハザマ「……」

かなえ「……K！」

K「……かなえか？」

かなえ「……うん！ あたしだよ！ セリナが現在地を送ってくれたから車ぶつ飛ばして駆けつけた！ ……(セリナに)でも、一体どうやって見つけたの？」

K、ブレスレットを見せる

K「……効果、あつたよ」

かなえ「……！」

K「おかげでこのザマだけだな……」

かなえ「……着けてくれてたんだ」

K「……セリナは、何か言っていないか……？」

かなえ「え……？」

K「何も、見えないんだ……」

かなえ「嘘……」

ハザマ「(手話と声) Kは、死ぬのか？」

セリナ、首を振る

セリナ「(手話) 目が眩んだだけだよ」

かなえ『目が眩んだだけ』……」

ハザマ「立てるか？」

K「(ジェスチャー) 待てよ……」

K「母さんはどうなった？」

ハザマ「かなり衰弱してるが、命に別状はない」

K「……。セリナ……。俺を助けに来たのか……？」

セリナ「……」

K「俺は……『ケダモノ』に魂を売った……。母さんやセリナを守る為とはいえ……無関係な人を身代わりにした……」

ハザマ「……」

K「もう、俺は、身も心も、闇の住人だ……」

ハザマ「光を愛する怪物もいる。光が闇を愛することもある」

K「……」

ハザマ「セリナにはお前が必要だ」

K「……終わつたんだな？」

ハザマ「ああ」

K「……」

K、座つたまま眠る

セリナ、目を押さえて苦しみ出す

ハザマ「(手話と声)……大丈夫か？」

セリナ、首を振る

ハザマ「(手話と声)2人とも、病院へ行くこう」

セリナ「(ジェスチャー)1ついい……？」

ハザマ「……？」

セリナ「(手話)頼みたいことがある……」

かなえ「『頼みたい』ことがある……」

【第12場】

ハザマ「ここに、1つの奇跡が起きた。だがこれは聞くに堪えない物語だ。残酷で、悲しく、苦痛を伴うに違いない。だが、俺達はどうしても伝えなかったんだ。どうか、最後まで目を背けないで欲しい」

照明、セリナ(眼帯)にスポット

ハザマ「ある少女が、想像を絶する痛みと引き換えに、恐るべき臓器密売の魔の手から生還を遂げた。残酷な神は、彼女から予め音を奪っていた。そして今度は光をも奪おうとした。だが、彼女は自らに課された運命を、覚悟によって光に変えた」

セリナ「(手話)神様は言ったんだ」

かなえ『神様は私に言った』

セリナ「(手話)『私がお前から奪ったもの分だけ、報いを与えていい』と」

かなえ『私がお前から奪ったもの分だけ、報いを与えてもいいと』

ハザマ「今日、その時が来た。俺達のような邪悪な日陰者とは訳が違う。彼女は堂々と素顔をさらし、『光の当たる場所』に立って踊る。今度は彼女が世界中から目を奪う番だ。彼女の名は、『カサンドラ』」

終わり